

晩 花

馬場あき子歌集



昭和歌人集成・4

晩 花

馬場あき子歌集

短歌新聞社

晩 花

＜昭和歌人集成 4＞

昭和60年 6 月10日 初版発行

昭和61年10月25日 3 刷発行

著 者 馬 場 あ き 子

発行人 石 黒 清 介

印 刷 協 同 印 刷 K K

発行所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9

振替口座 東京 5-21683

電 話 03 (312) 9 1 8 5

1092-000269-4362

定価 1400円

目次

北へ——	7
帰雁——	11
伊賀の鬼みち——	16
春の遠方——	19
古京晩花——	22
瘤ある林檎樹——	32
夏の花蔭——	37
ゆくともみえぬ——	41
秋の紫——	44
能登にて——	48
こきりこ——	52
菊を焚く——	56
冬の力——	60

空のまほら——63

春寒——68

憂春——75

国栖びと——81

いづこまで来し——84

月待ち——93

霧の王国——96

冬に佇つ——112

解説 伊藤一彦——117

略歴——123

あとがき——125

晚
花

北へ

来し方も無念無想のさびしさとなりて吹き飛ぶ鷗ありたり

東北の雪に発つ汽車いたづらに身をなすに似てふとほほまる

遠く来て三春^{みはる}の偶人^{でこ}の灯は暗し美女舞^{びんちようまひ}の紅くらし

さざれ水見つめて佇てる烏ゐてあな寂び寂びし覚悟のごとき

ふり仰ぎみれば鷗の腹太し静かにわれの年改まる

知りすぎし心のごとき石路の花長き日向はかすかに妬め

冬の雨ぐんぐん晴れてしまひたり落ちたる椿一つ朱を吐く

落葉踏む音よりいたくかすかにて野猫踏みゆく霜柱みゆ

一隅にゆきて死なむとする歩み羽ををさめし蜂は地にゐる

沈みつつ流るる木の葉見送れば思案ばかりの冬深みかも

ちらちらと冬かげろふの燃えてゐる鉄路もあこがれののちの静けさ

深みゆく季節のあはひ飛ぶ鳥のゆるく重げにゆく心かな

着ぶくれてひとり発ちゆく東北のふぶくときけばかすかにたのし

帰雁

風にゆく風の力を打ち泣きてありし乙女もここに土着す

山姥も出でて泣く日ぞ遠山に晴れながら降るみぞれみてゐる

山の林檎嚙みて痛めし冬齒もち静かに積る雪をみてゐし

山越えて何せんされど目的のなき山も越ゆ春の思ひに

言ふことをやめて空みるたをやぎて雁帰ること慕情のごとし

久里浜に売らるる冬の大魚ゐてあぎとへば青き空も音する

海の香の雪となりゆく大漁旗二月じげつの底に暗く身を揉む

家々に水甕の水ひそまりし立春りしゅんの厨・節分の井戸

高層を一気に上り空に降る雪をさびしみくだりきしかな